

# インドネシアの日本語教育

田 尻 英 三

(1983年10月15日 受理)

Japanese Language Teaching in Indonesia

Eizo TAJIRI

## はじめに

筆者は国際交流基金の派遣専門家として、1981年8月から1982年7月までインドネシア共和国のバンドン (Bandung) 市にあるパジャジャラン (Padjadjaran) 大学へ赴任し、1983年7月25日から8月5日まで再度の訪伊を行った。そしてインドネシアでの日本語学習者の熱心さに比べて、日本ではその実態がよく知られていないことや関心がうすいことを痛感した。この論文ではバンドン市の大学や高校での日本語教育の実態を報告し、将来の展望への問題点を指摘する。更に、インドネシア国内で出版されている日本語学習書や日本文学の翻訳書についてもふれる。

なお、インドネシアの日本語教育に関しては次のような研究があるが、以下この論文では筆者自身の調査にもとづく事柄を中心として報告することにする。

- |            |  |
|------------|--|
| 柴田 俊造      | インドネシアにおける日本語教育『日本語教育』19号                            |
| 近藤 功       | インドネシアのハイスクールにおける日本語教育—西アジア省<br>バンドン市を中心に—『日本語教育』30号 |
| 川瀬 生郎      | インドネシアで日本語を教えて『EXPERT』No.4                           |
| 同          | 海外における日本語教育—東南アジア—『国際文化』187                          |
| 森田 良行      | 指導以前—研究を阻む客観的条件 インドネシア パジャジャ<br>ラン大学の場合『日本語教育』39号    |
| ウィウィ・イスハック | インドネシア語で教える教材の必要条件と教材作成の問題につ<br>いて『日本語教育』40号         |
| 伊藤 勲       | インドネシアのジャカルタにおける日本語教育とその問題点<br>『国際学友会日本語学校紀要』第4号     |
| 佐藤 静子      | インドネシアと日本『日本語教育研究』第15号                               |
| 草薙 裕       | アジア諸国の大学における日本語教育『言語』8巻3号                            |
| 国際交流基金     | 『昭和50年度海外日本語教育専門家報告』                                 |
| 同          | 『海外における日本語教育の現状と問題点 (海外日本語講師研<br>修会レポート)』            |

国際交流基金

『日本語教育国際会議 第2回 東南アジアにおける日本語教育のあり方を探る』

## 1. インドネシアにおける日本語教育の沿革

日本語教育学会編『日本語教育事典』(大修館書店刊)の「世界の日本語教育」(椎名和男氏執筆)と「インドネシアの日本語教育機関」(川瀬生郎氏執筆)や前掲の柴田論文による沿革の概略は次の通りである。

- 1942～1945 日本軍政下ではインドネシア全域の小中学校で日本語が正課となる。
- 1958 ジャカルタの日本文化学院に日本語コースが設置される。
- 1960 コロンボプランにより同学院への日本人講師が派遣される。
- 1963 バンドン市のパジャジャラン大学文学部に日本語日本文学科が設置され、バンドン外国語学院の日本語科(1960年開講)はこれに吸収される。
- 1964 国立のジャカルタ外国語大学とバンドン教育大学に日本語科が設置される。
- 1967 日本政府の東南アジア六か国への日本研究講座寄贈の一環として、国立インドネシア大学文学部に日本研究科が設置される。

現在は以下に述べるような各機関に日本語科が開設されている。

## 2. インドネシアの日本語教育機関

国際交流基金発行の『海外日本語教育機関』(昭和50年度版)によると、次のような機関では日本語が教えられているということである。

- Akadems Usaha Perikanan (水産短期大学) Jakarta
- Akademi Bahasa Asing (国立外国語大学) Jakarta
- Akademi Bahasa dan Kebudayaan Jepang (日本語日本文化短期大学) Jakarta
- Institute of Language and Culture of Japan (日本文化学院) Jakarta
- Embassy of Japan, Information and Cultural Office (在インドネシア日本大使館広報センター) Jakarta (筆者注、現在は開かれていないと聞いている)
- Universitas Indonesia (インドネシア大学) Jakarta
- Evergreen Courses (エバーグリーン日本語学校) Jakarta
- Yogtakarta Nippon Bunka Gakuin (ジョグジャカルタ日本文化学院) Yogyakarta
- Perguruan Tinggi Swadaya Akademi Bahasa Asing (スワダヤ大学外国語短期大学部) Medan (筆者注、北スマトラ)
- Universitas Padjadjaran (パジャジャラン大学) Bandung

- Perpustakaan Umum Makassar (マカッサル公立図書館) Ujung Pandang
- Institut Keguruan dan Ilmu Pendidikan Manado (マナド教育大学) Manado
- Rikugun Sireibu Nihongo Kyoshitsu (陸軍省日本語講座) Jakarta
- Departmen Luar Negeri (インドネシア外務省) Jakarta
- Lembaga Bahasa Jepang (日本語学院) Jakarta

この他、次のような大学・短期大学・私立教育機関もある。

- バンドン教育大学
- バンドン日本文化学院
- バンドン外国語短期大学
- スラバヤ教育大学
- アイルランガ大学 (Surabaya)
- 北スマトラ大学
- さくら日本語学院 (Jakarta)
- トリサクティ観光旅行短期大学 (Jakarta)
- 日本文化センター (国際交流基金ジャカルタ支部)

筆者の滞在期間中に催された国際交流基金ジャカルタ支部主催の「日本語弁論大会」には前記以外の機関からも多くの参加者を集めて熱気のこもった大会となったが、それらの機関のうち現在は経営があぶなくなっているものもあると聞いており、筆者はその詳しい実態をつかんでいない。この実態調査はぜひとも何らかの機関で行なわれなければならないものである。

### 3. パジャジャラン大学のカリキュラム

ジャカルタにあるインドネシア大学のカリキュラムについては、田中彰氏の『日本人と東南アジア』(小学館発行)に詳しいので、これと比較するためにパジャジャラン大学のカリキュラムを次に示す。

パジャジャラン大学は11学部(法, 社会・政治, 経済, 文, コミュニケーション, 心理, 医, 歯, 農, 獣, 数理)を擁する総合大学であり、文学部の中にも次の10学科がある。

- インドネシア語インドネシア文学科
- スンダ語スンダ文学科
- 英語英文学科
- フランス語フランス文学科
- ドイツ語ドイツ文学科
- ロシア語ロシア文学科
- 日本語日本文学科
- アラビア語アラビア文学科
- 歴史学科
- 人類学科

筆者の在任中は旧課程(5年制)と新課程(4年制)が併存しており、各々の必修単位も異なっている。ここでは例として1981年度の第1期分の日本語教育に関する時間割のみを示す。なお、一つの講義時間は特にことわらない限り90分である。1年生から3年生までは新課程で、4年生と5年生は旧課程である。

#### ○1年生

月: 表記, 会話(45分), 日本語基礎

火: 日本語基礎, 会話(90分)

水：(日本語日本文学科の開講科目無し)  
木：日本語基礎, 会話 (45分), 日本語基礎  
金：日本語基礎  
土：日本語基礎

○ 2年生

月：読解, 会話 (45分), 漢字, 読解  
火：日本史, 会話 (90分), 読解  
水：(日本語日本文学科の開講科目無し)  
木：読解, 会話 (90分), 日本文化  
金：日本文学, 読解  
土：読解

○ 3年生

月：読解, 漢字, 会話 (45分), 読解  
火：会話 (90分)  
水：読解  
木：読解, 作文, 会話 (45分)  
金：読解, 文法  
土：読解

○ 4年生

月：読本講読, 漢文  
火：読本講読, 翻訳, 文学 (古典)  
水：(日本語日本文学科の開講科目無し)  
木：読本講読, 読本講読  
金：言語学 (国語学の意), 読本講読, 文化史  
土：読本講読

○ 5年生

月：読本講読, 文学 (近代)  
火：読本講読, 文化史  
水：読本講読  
木：読本講読, 言語学  
金：読本講読, 翻訳  
土：読本講読, 漢文

水曜日の午後はイスラム教の礼拝式があるので、殆どどの学生は講堂に集められる。このため水曜日は多くの学科では講義を開講しないか、もしくは午前中のみ開講している。

この旧課程から新課程への移行については、このような時間数や講義内書の違いだけではなく、Sarjana 論文（日本では学部の卒業論文にあたる）の形式が変わることになっている。つまり、従来の Sarjana 論文は日本語で書き、インドネシア語の要約をつけるという形式であったが、新課程からは本文はインドネシア語で書き、日本語の要約をつければよいということになっている。これは現地の教官によれば、インドネシアの教育文化省（日本の文部省にあたる）の生産性の向上を目指した多数の高学歴者の育成という目的があるという。このカリキュラム改訂により、単なる日本語関係の講義時間数の減少にとどまらず、論述体の日本語があまり書けなくても日本語日本文学科の Sarjana 号がとれることにより、日本語の表現・理解能力の低下が心配される。このため新課程での教材の精選化・指導法の改善が急務となっている。これに対してバンドン教育大学は4年制であるが、論文の形式はパジャジャラン大学の旧課程と同じものである。

また現在パジャジャラン大学では Sarjana 論文の作成や口頭試問に必ず日本人の派遣講師が指導・参加することになっているが、新課程での論文審査をするためには日本人講師がある程度のインドネシア語能力を早く身につけておかなければならないようになるであろう。この点についてはパジャジャラン大学側もまだ十分に検討していないようである。

#### 4. パジャジャラン大学とバンドン教育大学の卒業論文

パジャジャラン大学では、旧課程の三年次までに Sarjana Mudah の試験をうけなければいけない。これは一種の進級試験のようなもので、題材は日本のことに限らずインドネシア国内の事物についても自由に選んでよく、日本語で8000字程度の論述を行ない、インドネシア語の要約をつけるものである。筆者の在任中に旧課程でまだ Sarjana Mudah 論文の審査をうけていない学生達の試問があり、論文を提出した全員が合格した。これを最後として Sarjanb Mudah の論文審査はなくなった。もしこの試問で不合格ならば、時期的に限られていることもあり自動的に中途退学となる。Sarjana 論文の題目の方は、日本語・日本文学・日本史の中から選ばなければならないが、筆者の在任中は、「南進」の実態をトコ・ジュパンの面から調査したもの、女性ことば、聖徳太子、能、武者小路実篤などの論文を審査した。

これに対して、バンドン教育大学の Sarjana 論文の題目はより日本語教育に直接するものとして、前述のパジャジャラン大学とは違った興味があった。次に掲げる論文題目は、筆者の在任中にバンドン教育大学文芸学部日本語日本文芸学科の日本人講師の派遣期間に半年間のブランクが生じたため、筆者がその Sarjana 論文の指導審査に参加したものである。

○日本語の副詞とインドネシア語の副詞の比較

○日本語の副詞とスダ語の kecap Keterangan と kecap Anteuran との比較

○バンドン教育大学文芸学部日本語日本文芸科における1977年度入学生のバンドン国立高等学校における教育実習の成果について

- 1981年度バンドン教育大学文芸学部日本語学科の四年生の作文の調査—動詞に関する使い方の能力について—
- 第1, 2, 8, 10のバンドン国立高等学校における日本語の動詞の教え方について
- 日本の女性ことば
- バンドン第2国立高等学校における日本語の授業における上達の努力について—平仮名と片仮名の教え方について—
- 日本語教授に対するスメダン国立高校の生徒の関心について
- チカンペク国立高等学校における日本語教育の観察
- BUR 高等学校における日本語教育を高めることについて
- 日本語の授業に関する BPK 第2キリスト高等学校の生徒たちの関心
- 日本語学科の学生にとってバンドン教育大学の図書館の役割
- スメダン県タンジュンクルタ郡での教員組合について

最後の二つの論文は日本語日本文芸学科にとっても必ずしもふさわしいものではないので、むしろ現地の教官の指導法の問題があろう。

Sarjana 論文にはこの大学もパジャジャラン大学と同じく、現地の指導教官2名と日本人講師1名の承認のサインが必要とされている。しかし、残念ながらそのサイン通りに現地の教官の全員が学生の論文指導に力を注いでいるわけではなく、最終稿の段階では派遣日本人講師にかなりの負担がかかることも事実である。

なお、Sarjana 論文の提出時期は、パジャジャラン大学の場合は希望があればいつでもうけつけるが口頭試問は月一回だけ行ない、バンドン教育大学の場合は年に二回の口頭試問がある。従って、前述のバンドン教育大学の論文は半期分だけである。

このバンドン教育大学の論文の中で、バンドン市とその近郊の高等学校における日本語教育の実情を報告しているものがあり、大学での日本語教育とは違った面があるので 7. でその内容を報告する。

## 5. インドネシアにおける日本教育のテキスト

ここでは、筆者がインドネシア滞在中に購入した現地刊行の日本語テキストをあげて簡単な説明を加える（『日本語教育事典』の付録2日本語教科書・教材一覧も参照のこと）。(1)。(2)は戦時中の出版物をジャカルタの古書籍商で購入したものであり、(3)は現在使用されていないものであるが参考までに掲げた。掲出順序は刊行年月日の古いものから順に並べ、最後に刊行年の全く不明なものを掲げた。また、原著に日本語の書名がついていないものもあるが、ここでは原著通りとしあえて訳語を付さなかった（書名表記は原著通りとする）。

- (1) BOEKOE PELADJARAN PEMOELAN BAHASA NIPPON インドネシア初等日本語

## 会話読本

編著者名無し。1942年9月9日刊行。アジアラヤ出版部（ジャカルタ）発行。

一般人向けの日本語会話用テキスト。会話文例と基礎的な語彙を日本語インドネシア語左右見開きにして対照させている。簡単な文法用語や動詞活用表、更に「ねずみのちえ」や「桃太郎」の話ものっている。

## (2) 日本語 巻四

内務省文教局編。1943年11月30日刊行。ジャワ軍政監部（ジャカルタ）発行。

日本占領下時代の日本語教育用読本。筆者はパター州の中学校で使用された巻四のみを購入できた。日本語は漢字仮名まじり文でしるされ、インドネシア語は全く無い。内容は、「日本のしるし」、「日の丸の旗」から始まって、「牛若丸」や「かぐや姫」などのおとぎ話、更には「にいさんの入営」、「にいさんの愛馬」、「南洋」、「三勇士」などが並んでいる。各章の末尾に語法の項が付されている。

## (3) Peladjaran BAHASA-JEPANG

T. Kurita Nasurun Effendi, T.B. Pasaribu, Rachmat E.S. 共著。1963年7月8日刊行。Parwata Kentjana 商会（ジャカルタ）発行。

高等学校用、かつ一般向け独習用テキストである。文型・文法を中心にインドネシア語で説明している。巻末の文字一覧表にのみ平仮名、片仮名と簡単な漢字が記載されている。各章初に主要な語彙の日本語インドネシア語の対照表もついていて、利用者の便宜をはかっている。現在刊行されていないのは惜しい。

コロンプラン派遣日本語講師の伊藤芳照氏の推薦文が付いている。

なお、裏表紙にこの本の他にもインドネシア語・日本語・英語辞典や会話用テキストの紹介があるが、筆者は入手していない。

## (4) KAMUS JEPANG-INDONESIA

Badaruttaman Akasah 編。1972年4月17日付の序文があるが刊行年は不明。BADAR 社（バンドン）発行。

800ページの大部なものだが、油印版のため印刷が不鮮明で紙質も悪い。現在は刊行されていないようで、筆者はバンドンの古書籍商で購入した。見出しの日本語はローマ字で表記されている。語釈に誤りがあり、使用にあたっては注意を要する。

## (5) PELAJARAN BAHASA JEPANG 日本語学習書 巻1,2

T. Chandra 著。巻1は1972年6月の、巻2は1974年11月10日付の序文はあるが刊行年は不明。エバーグリーン日本語学校（ジャカルタ）のテキスト。

基本的な文型や熟語を、いろいろな文例をあげて説明している。日本語の部分は漢字仮名まじり文であり、これはインドネシアで刊行されている日本語教育用のテキストでは唯一のものである。この日本語の文例の他に「さくら」と「赤とんぼ」の曲が楽譜も付いてのせら

れている。このエバーグリーン日本語学校のテキストとしては“Percakapan BAHASA JEP-ANG 日本語会話”と後に掲げる(11)の日本語インドネシア語辞典がある。

(6) 漢字練習帳 I・II・III・IV

Badaruttaman Akasar 編。1974年1月付の序文がある。刊行年は不明。BADAR 社（バンドン）発行。

IからIVまでで漢字1581字が扱われており、各々の文字について音・訓・熟語の例・筆順を示し、更に練習用のますがたがついている。これらの文字の選定基準についてはふれられていない。油印版である。筆者は現在Iのみを手に入れている。

(7) PEPCAKAPAN BAHASA JEPANG

Badaruttaman Akasar 著。1974年4月付の序文がある。刊行年は不明。BADAR社（バンドン）発行。

日常生活に必要な日本語の会話文をローマ字表記で示し、それに対応するインドネシア語を対照させて説明している日本語会話独習書である。巻末と裏表紙に平仮名・片仮名の五十音図があるが、本文中では利用されていない。また本文中の説明にも誤りがある。油印版なので印刷が不鮮明である。

(8) DASAR<sup>2</sup> BAHASA JEPANG I・II・III

Badaruttaman Akasar 著。1976年4月付の序文がある。刊行年は不明。BADAR 社（バンドン）発行。

文法や文例を中心とした日本語独習書。本文中に手書きで漢字や仮名が用例として書かれているが、その文字に誤りが多くテキストとして問題がある。しかし、分量としてこれだけまとまった日本語学習書は他にないだけに惜しい気がする。油印版で印刷は不鮮明。

(9) DASAR DASAR BAHASA JEPANG I・II

パジャジャラン大学文学部日本語日本文学科教官（Wiwi Ishak, Adji Sumarna, Endah Satari, Niniek Sjatirin, Yetti Gardanegara, Yuliasih Ruhiyat）共著。1978年5月刊行。パジャジャラン大学のテキスト。

国際交流基金刊“DASAR DASAR BAHASA JEPANG”に練習問題や用例を増やし、さし絵も現地の事情にあわせて新しく加えてテキスト化したもの。今後インドネシアでの日本語教育の教材作りのあり方に指針を与えるものであろう。巻末に仮名で日本語の例文が示されているが、その他はローマ字表記の日本語をインドネシア語で説明している。これはバンドン市の印刷事情によるものであろう。

また、パジャジャラン大学のテキストとして『接続詞の使い方』（1979年3月1日付の序文がある）がある。この書物は1978年3月から1979年3月までこの大学へ国際交流基金から派遣された早稲田大学教授森田良行氏と日本語日本文学科の教官の共同研究をまとめたものである。前半は「および」、「ならびに」などの主要な64の接続詞の用法・例文・解説を漢字

仮名まじり文であげ、後半はそのインドネシア語の翻訳文があげられていて、接続詞の五十音順索引が付されている。これは内容的にもすぐれており、日本人の派遣講師との共同研究の方法としても立派な例として推賞できるのだが、惜しむらくは市販されておらず、現在までのところ他の日本語教育機関が十分に利用できる状態にないことである。

(10) KAMUS UMUM JEPANG INDONESIA, INDONESIA-JEPANG

Prof. Yoshida Tadashi, Adam Saleh 共著。1980年初版, 1981年9月第二版。Sastra Hu-daya 社(ジャカルタ)発行。

見出しの日本語はローマ字表記されている。巻末に数量に関する語句(この部分のみ漢字で表記)の一覧と五十音図(平仮名・片仮名)が付いているポケット版の辞書。記述にまちがいがみられる。

(11) KAMUS JEPANG-INDONESIA 日本<sup>インドネシア</sup>語辞典

T. Chandra 編。1981年1月付の序文がある。刊行年は不明。エバーグリーン日本語学校(ジャカルタ)発行。

日本語の見出しはローマ字と漢字・仮名を併記し、主要な語句については意味の分化を番号で示している。内容的にもすぐれていて訳語も的確でインドネシア国内で刊行されている辞書として今のところ最もよいものといえよう。この形式は日本語を学習するインドネシア人にとっては好ましいものであるが、逆に日本人でインドネシア語初歩を学習している者にとっては少く使いにくいものであろう。日本語の例文が少ない点と、漢字にふり仮名がついていない点が惜しい。

(12) PELAJARAN BAHASA JEPANG Jilid I

Abd. Rachman Asy'ari (Trimurti 高等学校教諭), スラバヤ日本総領事館日本語講座 共著。1982年8月20日刊行。bina ilmu 社(スラバヤ)発行。

文法と文例を中心としたトリムルティ高等学校とスラバヤ総領事館日本語講座(一般向き)のためのテキストである。日本語はローマ字表記されており、インドネシア語で説明がついている。漢字や仮名が全く見られないのは少し気になるが、文構造や活用の説明などユニークな点がみられる。

なお、この会社はオフセット印刷もしていて、巻末の販売図書目録には国際交流基金, JICA・国際学友会などのテキストをオフセット印刷しているようであるが、実物は見えていない。

(13) ひらがなをよみましょう 1・2・3

Eman Suhandi (西ジャワ州国立スメダン高等学校教諭)。私家版。1982年刊行(但し、このテキストはすでに数年使っているとのこと、初版の刊行年は不明)。

スメダンの三つの高等学校でエマン氏が使っている高校生用のテキストである。日本語の仮名の文とインドネシア語の説明がついている。日本語の文に一部あやまりがある。エマン

氏は戦時中に日本軍から日本語を習った世代の一人で、その当時の日本語のテキストを数種類所蔵しておられる。このエマン氏の日本語教育は技術的な面もすばらしく（筆者が見学に行った時、スメダンの高校生達の授業に対する的確な反応を見ておどろいた）、多くの優秀な学生達をバンドンの大学へ送り込んでいる。

#### (14) NIHOŃGO NO HANASIKATA BICARA BAHASA JEPANG

Badaruttaman Akasar 著。刊行年時の記載は無い、BADAR 社（バンドン）発行。

独習用の文例集で、主要な語彙の説明も付いている。日本語はローマ字表記されていて、それにインドネシア語で説明が付けてある。扱われている日本の事情が古く、日本語のまちがいもかなりある。印刷も油印版で不鮮明。

#### (15) PELAJARAN PRAKTIS BAHASA JEPANG

T.Uji, W.J.S. Purwadarminta 共著。刊行年時の記載は無い。NUR CAHAYA 社（ジョグジャカルタ）発行。

文法・文例中心の日本語独習書である。日本語はローマ字表記されているが、長音の符号がつけられていないので、音の長短の区別がつかない。日本語の誤りもある。

#### (16) KAMUS Jepang-Indonesia, Indonesia-Jepang

T.Uji, W.J.S. Purwodarminta 共著。刊行年時の記載は無い。NUR CAHAYA 社（ジョグジャカルタ）発行。

日本語はローマ字表記されていて、(15)同様長音符号は付されていない。ポケット版。日本語の語釈としてのインドネシア語に誤りが多い。

## 6. インドネシア語に翻訳されている日本文学

現在インドネシア国内では日本語学習熱がさかんになっていっているが、インドネシア人の中で直接日本語で書かれた日本文学を読める人となるとごくわずかしかないし、仮に日本語で日本文学を読もうと思ってもジャカルタにある日本書籍専門店のジャカルタ書房では、200円程度の文庫本が運搬費・税金がかかる関係か現地では1000円程度するので、普通のインドネシア人が気軽に買える金額ではない。ジャカルタならば日本文化センターに一応の日本文学作品がそろっているが、これとても利用できる人は限られている。従って、インドネシア人が日本文学に接するとすれば、我々日本人と同じく翻訳にたよることになる。以下に掲げる日本文学の諸作品はいずれもインドネシアで文芸関係の出版社として知られている PUSTAKA JAYA 社の出版であるが、その全てが英語からインドネシア語への二重訳となっている。パジャジャラン大学の教官の中にはこれらの翻訳書の誤りを正し、日本語から直接インドネシア語訳をなされた方もあるが、まだ出版されていないのが現状である。インドネシア語訳の出来不出来は、最初の英語訳の出来不出来にかかわっているように筆者は考える。

## (1) KAPPA

芥川竜之介著「河童」。1975年初版。Winarta Adsubrata 氏が英語訳のものからインドネシア訳したと記しているだけで、英語翻訳者についての記載は無い。誤訳が多い。

## (2) SENANDUNG OMBAK

三島由紀夫著「潮騒」。1976年初版、Meredith Weatherby 氏の *The Sound of Waves* を Ayatrohaedi 氏がインドネシア語訳したもの。インドネシア語の表題は「波の低唱」の意である。

## (3) JEMBATAN IMPIAN

これには谷崎潤一郎の「夢の浮橋」と「春琴抄」の二つが収録されている。1976年初版。Howard Hibbett 氏の *Seven Japanese Tales* 中から *The Bridge of Dreams* と *A Portrait of Shunkin* を Sugiarta Sriwibawa 氏がインドネシア語訳したもの。「夢の浮橋」のインドネシア語訳は「夢の橋」で、「春琴抄」のインドネシア語訳 *Wajah Shunkin* は「春琴の容貌」の意である。訳に少し問題がある。

## (4) RUMAH PERAWAN

川端康成著「眠れる美女」。1979年初版。Edward G. Seidensticker 氏の *The House of the Sleeping Beauties* を Asrul Sani 氏がインドネシア語訳したもの。インドネシア語の表題は「娘の家」の意。

## (5) RAHASIA HATI

夏目漱石著「こころ」。1978年初版。Edwin McClellan 氏の英訳（書名は不記載）を Har-tojo Andangdjaja 氏が翻訳したもの。インドネシア語の表題は「心の秘密」の意。訳に問題がある。

## (6) KUIL KENCANA

三島由紀夫著「金閣寺」。1978年初版。Ivan Morris 氏の *The Temple of the Golden Pavilion* を Asrul Sani 氏がインドネシア語訳したもの。インドネシア語の表題は「黄金の寺」の意。金閣寺に関する語の訳は誤っている。

## (7) MALAM TERAKHIR

三島由紀夫著「近代能楽集」の中の「卒塔婆小町」。1979年初版。Toto Sudarto Bachtiar 氏がインドネシア語訳をしたが、英訳本についてはふれていないが恐らく次の(8)と同じくドナルド・キーン氏の英訳本によったのであろう。この作品は現地の劇団が何度も上演しているものであり、パジャジャラン大学で上演されるのを見たが、簡素な舞台装置ながら俳優達の熱演はすばらしかった。この劇の上演は後述する日本語文化祭の一環として行なわれた。

## (8) KANTAN

三島由紀夫著「近代能楽集」の中の「邯鄲」。1979年初版。Donald Keene 氏の *Five Modern Nō Play* から Masnendi 氏がインドネシア語訳をしたもの。

### (9) KEINDAHAN DAN KEPILUAN

川端康成著「美しさと哀みと」。1980年初版。Howard Hibbett 氏の *Beauty and Sadness* から Asrul Sani 氏がインドネシア語訳したもの。インドネシア語の表題は「美しさと悲しみ」の意。

この他、北海学園大学教授山根対助氏（国際交流基金よりインドネシア大学へ派遣されている）の御教示によれば、川端康成の「雪国」と志賀直哉の「城の崎にて」がインドネシア訳されているという。また、最近吉川英次の「宮本武蔵」がインドネシアの新聞コンパス紙に連載されて評判になっているという（これも英語版からの翻訳）。前述した如く、これらはいずれも英語版からの二重訳であり、現在現地の日本研究者の中には日本語の原典から直接インドネシア語訳できる人達もいるので、今後は翻訳事情も少しはよくなっていくと思われるし、実際にそのような計画が進みつつあるとも聞いている。

また、最近文学の翻訳だけではなく、中根千枝氏の“Japanese Society”（Pelican Book 版）やルース・ベネティクトの「菊と刀」などがインドネシア語訳されている。

## 7. バンドン市及びその近郊の高等学校における日本語教育

以上は、大学や一般の人達向けの日本語教育の実情を報告してきたが、ここではインドネシアにおける日本語教育の将来像を考える上でぜひとも必要な高等学校での日本語教育がどのように行なわれているかを報告する。前述した如く、筆者自身もスメダンの高等学校での日本語の授業を参観したが、以下にはバンドン教育大学の Sarjana 論文の中にいろいろと興味深いデータがあげられているので、それを紹介することにする。インドネシアの高等学校で日本語教育を行なっているのはバンドン市及びその近郊にかたまっていて、それ以外で日本語教育に伝統のある高等学校といえばスラバヤのトリムルティ私立高等学校（5. の(12)参照）くらいで、ジャカルタの教育大学にはまだ日本語科が設置されていないのである。なお、インドネシアでは日本と違って、高等学校の教師になるためには教育大学を卒業しなければならない。

Tuty Suhaeti 氏の「B.U.R. 高等学校における日本語教育を高めることについて」によると、1964年のカリキュラム改訂によって、第2選択外国語として日本語が加えられたということである。第1外国語は英語であり、第2外国語でもドイツ語・フランス語・アラビア語・オランダ語などは早くから第2外国語として認められていたのに対して、日本語は現在でもまだ他の外国語に比べて関心が高いというわけではない。バンドン市内で日本語を教えている高等学校は国立7校、私立4校である。例えば、私立高校の B.U.R. 高等学校では1年生の後期から3年生の後期まで週2時間の授業がある。この学校では平仮名・片仮名・文型練習と簡単な会話などが授業内容である。Tuty 氏自身もそうであるが、一つの高等学校内での授業時間数が少ないため正式採用されずに数校のかけもちの非常勤となり、生活が安定しないのである（インドネシアでは学生の身分でも教壇に立てる）。

この事態を改善するために、教育大学側からもっと教育文化省に日本語の授業の重要性をアピールすべきである、と論文を結んでいる。他にも数人これと同じ意見を述べている論文があった。

これに対して国立高等学校の日本語の授業は、Titin Rochaeni 氏のバンドン第2国立高等学校における日本語の授業における上達の努力について」では次のようになっている。

この高等学校では1968年から第2選択外国語として日本語がとり入れられていて、週に2時間（言語科は週7時間）教えられる。しかし、実際の授業での教材編成は難しく、1978年に西ジャワ州文部省高等学校カリキュラム科長ヒダヤト氏は Kabul Iskandar 氏と Achlan 氏に指導要領の作成を依頼し、他に3人の日本語教師と共に文型を中心とした指導要領を作った。これが現在でもバンドン地区の高等学校の日本語教育上の目安となっている。この学校の学生にアンケート調査したところ、学生達は平仮名・片仮名・漢字などの文字に興味をもっているが、その習得には困難を感じているのがわかったのである。

生徒の日本語の授業についての関心は、Lelly Susiani 氏の「日本語の授業に関する BPK 第2キリスト高等学校の生徒たちの関心」に詳しい。この論文では、2・3年で日本語を受講している188人（2年生104人、3年生84人）にアンケート用紙を渡し、回収した179人について分析を行なっている。これによると、学生が授業をうける前にもっている学生自身の日本語学習の目的は、一外国人として日本人と交流を深めるためとか、インドネシアに日本企業が多いからとかというものであったが、授業をうけてからは、日本人との交流のためとか、授業としてうけなければならないからとかの他に、日本語科のある大学への入学の準備のためという具体的な目標をもってくる。しかし、一方では10%程の学生は日本語は国際言語ではないからという理由で、あまり授業に関心を示さないのである。授業内容については、半数以上の学生が平仮名を書くことに興味を示している。そして、卒業後大学の日本語科へ進学し日本語の勉強を続けたい学生は77%、まだわからないが11%、続けないが12%となっている。この点からも高等学校での日本語教育の重要性がわかるのである。

このように、大学進学後も日本語の学習を続けたいという学生の傾向は、バンドン近郊の農村部であるチカンペク（Cikampek）の高等学校でも同様であることは、Anthony R Diharja 氏の「チカンペク国立高等学校における日本語教育の観察」によって知られる。なおチカンペク国立高等学校では、言語学科でも3年生になってはじめて日本語の授業が週4時間になるのである。

バンドン市では年に1回4大学の協力で日本語文化祭が開かれている。この文化祭の期間中にいけ花のデモンストレーションや日本映画の上映、大学生のスピーチコンテスト、漢字コンテスト・習字コンテストなどにまじって、1校2名の代表による高校生の日本語朗読コンテストがひらかれる。これはあらかじめ与えられたいくつかの文章を暗記して演壇に立って話すのであるが、和気あいあいの中にも緊張感があふれたすばらしいコンテストで日本語教育のレベルの高さを感じた。

また、筆者の在任中国際交流基金ジャカルタ支部の後援を得て、高等学校で日本語を教えている教師のための研修会が行なわれた。四日間泊りこみで、ジャカルタの日本文化センターの原・山崎両講師やパジャジャラン大学、バンドン教育大学の教官の講義を受けディスカッションをしたので

あるが、予想以上に熱心な質問が相つぎ充実した研修会であった。この研修会は数年とだえていたそうで、今後せめて隔年にでも開かれれば、高等学校の日本語教育のレベル向上に直接役立つものと思う。更に、以前の研修会では最後の日に試験があり、高得点者は日本へ研修旅行へ行けたということで、それが一層教師の学習意欲をそそっていたそうであり、参加した全部の教官がこのような制度の復活を強く要望していた。期間は1982年3月15日から18日までであった。

## 8. インドネシアにおける日本語教育の問題点

以上述べてきたことのまとめとして、またインドネシアにおける日本語教育の将来像を併せ考えることとして、項目を分かって述べる。

### (1) 現地の実態の把握

インドネシアは国土が広大なだけでなく、国内の民族・宗教・言語・風俗などが多様であることで知られているが、日本語教育の面でも同様に、パジャジャラン大学やインドネシア大学のように、独自に初歩の日本語教育のテキストを編纂したり、日本研究のレベルに近づいている大学もあれば、北スマトラ大学やスラバヤ教育大学のように日本語教育がいま始まったばかりの大学もある。またバンドン教育大学のように若手教官を中心に研究体制が整いつつある大学もある。町にはまさにピンからキリまでの日本語学習塾があり、一見日本語熱は盛んであるようであるが、学生の学力・目的・年齢など雑多であり、その背景には日本企業へのあこがれと不満（日本の合弁企業は、日本語のできるインドネシア人を高い給料で雇うが、仕事は通訳以外のことはさせず、日本での技術研修の道などは閉ざされている）がある。

また、前述した如く、大学の設置わくの違い（東アジア科の中の日本科や日本語日本文学科など）や現地教官の専門や興味の違いからカリキュラムが理想とは違ったものになっている点も問題となる。

派遣された講師の方からみれば、都市によって生活程度や物価がかなり違い、借家の家主やメイドとの関係でストレスがたまり、よほど注意しておかないとしばしば体調をくずすことになる。

### (2) 有効な指導や援助

(1)に関係するが、各々の機関では今最も必要としていることが一様ではない。そのいろいろな要求を理解しておかなければ有効な指導や援助ができない。例えば、現地では日本関係の資料が絶対的に不足しているのであるが、ある時期にまとめて同じ種類の書籍を寄贈しても、それを使いこなせる機関とそうでない機関がでてくる。一方継続的な援助も必要で、ある年度にはかなりの数の学生が入手できた書籍が数年後には全く入手できなくなるということもある。但し、インドネシアでは著作権法というのはあっても実質的にはないようなもの

なので、すぐオフセット版（いわゆる海賊版）が売り出され、結果的には需要を満たすという場合が多いのではあるが。

高等学校での日本語教育の場合、教材の選択が難しいが、むしろ各校に一台簡単なものでもよいから和文タイプライターがあれば、どれだけ現場教師が助かるであろうか。日本語の初歩コースなので平仮名、片仮名と基本的な漢字が打てれば用が足るのである。

教材を作る側からみれば、日本語教育の初歩的なものは国際交流基金からインドネシア語版が出ているが、詩歌や小説の解説、日本語の語彙体系・語彙史や文法の説明、敬語の用法など教材はまだ不足している。筆者も在任中、日本文学史のサイドリーダーにするために古典文学の中からいくつかの作品を選んでその一部分を口語訳し、パジャジャラン大学の教官と検討した後インドネシア語訳をしてもらった。これはまもなくまとめられて公刊の予定である。日本語インドネシア語辞典もぜひとも必要で、これも現地で国際交流基金から刊行されるはずである（筆者も校閲者として参加した。『基礎日本語学習辞典インドネシア語版』）。

### (3) インドネシア向けの日本語教育用のテキストの問題点

インドネシア向けのテキストは、従来国際交流基金や国際学友会から公刊されているが、筆者の在任中に出版された国際交流基金発行の『日本語 漢字入門 インドネシア語版』を使っていくつかの問題点を感じたので以下にそれを掲げる。

その一つは、インドネシア語訳の問題である。つまり、もとの日本文（東京外国語大学附属日本語学校教授伊藤芳照氏執筆）には無い、見出しの漢字の訳語がついている点である。例えば、「鳥」は“burung; ayam”となっているが、“burung”はよいとしても“ayam”ではにわとりになってしまいおかしいことになる。「第」は“nomol”となっており、これでは「番号」の意であり「順番」の意ならば“urutan”とか“aturan”とかになるべきであろう。本文の方でも「進」の例「進んだ思考」の訳として“ide yang modern”とあるが日本語の意味通りならば“ide yang maju berkembang”とした方がよいのではないだろうか。筆者は在任中にパジャジャラン大学の教官有志とこの本の全用例を検討し「利用の手引き」としてまとめたが、これもまもなくバンドンで公刊されるはずである。

またこの『漢字入門』自体471ページのものなのでしかたがないであろうが、利用する方からするとインドネシア語索引と部首索引は欲しいものであると思ったので、インドネシア語索引はパジャジャラン大学の日本語日本文学科の全教官が、部首索引は筆者が作成した。これらもバンドンで公刊の予定である。

このような作業は、より積極的に教材を利用しようという立場で考えられたものであり、それが当該国の日本語教育のレベルアップにつながるだけでなく、援助する側にも当該国の実態を知ってもらうことになると思うのである。

### (4) インドネシア国内の言語の問題

国内の言語の問題は、東南アジア諸国ではどの国でも程度の差こそあれ、同じような問題

をかかえているであろうが、特にこのインドネシアでは国内に多くの種類の言語がある。このことは日本語教師の側としては一応注意しておかなければいけないことである（最近を対象の言語によって教育方法を変えて、より有効的に教育効果をあげようという動きがあるが好ましいことである）。インドネシアでは独立後、若い層を中心にしてインドネシア語が広まりつつあるが、ジャワ島だけでもいろいろと事情が異なる。例えば、ジャカルタはもともとマレー語の話されていた地域であるが、ジャワ語・スンダ語・中国語などが入ってきて独特のジャカルタ方言区となっていて、専用の辞書が出版されている程である（KAMUS DIAL-EK JAKARTA, Abdul Chaer 編, 1976年刊行, Nusa Indah 社発行）。バンドンはスンダ語、ジョクジャカルタやスラバヤはジャワ語の中心地である。このような事情を端的にあらわしているものとして、S. Wojowasito 氏の“PENGAJARAN BAHASA KEDUA”（『第2言語の教授法』, 1977年12月26日付の序文があるが刊行年は不明である。Shinta Dharma 社バンドンが発行）がある。この本には“Bahasa Asing, Bukan Bahasa Ibu”（母語ではなく、外国語）という副題がついていて、インドネシア国内にも多くの言語があるが、ここで言う第2言語とは英語などの外国の言語であるとわざわざことわっているのである。

これに対して、A.S. Broto 氏は“PENGAJARAN BAHASA INDONESIA”（『インドネシア語の教授法』, 1980年初版, Bulan Bintang 社ジャカルタ発行）では「第2言語」を別の意味で使っている。つまり、副題として“Sebagai Bahasa Kedua di Sekolah Dasar Berdasarkan Pendekatan Linguistik Kontrasif”（対照言語学的アプローチを基礎とした小学校における第2言語として）でもわかるように、各地方語を第1言語としている。同書によると、1964年のカリキュラム改訂では小学校の1年から3年までは地方語を週8時間、4年から6年まではインドネシア語を週6時間教えるようになった。続いて1968年のカリキュラム改訂では3年からインドネシア語を地方語と混ぜて週6時間教えるようになった。更に1975年のカリキュラム改訂では地方語についてはふれずに1年から全地域でインドネシア語を教えるように決まり新制度のもとでの小学校教師の養成を旨ざしている。これについて Broto 氏はインドネシア語教授の初歩の段階では、各地方語とインドネシア語を対照させて学ばせるのがよいとして次のような例をあげている。

| インドネシア語        | ジャワ語          | スンダ語         | (日本語訳)    |
|----------------|---------------|--------------|-----------|
| Budi menulis   | Budi nulis    | Budi nulis   | (ブディが書く)  |
| Wati membaca   | Wati maca     | Wati maca    | (ワティが読む)  |
| Iwan makan     | Iwan mangan   | Iwan dahar   | (イワンが食べる) |
| Ibu memasak    | Ibu olah-olah | Ibu masak    | (母が料理する)  |
| Bibi menyapu   | Bibi nyapu    |              | (おばが掃く)   |
| Bapak mengapur | Bapak ngapur  | Bapak ngapur | (父が石灰を塗る) |

実際今でも各地方では各々の地方語（部族語）が教えられているのが実情である。例えば、

Judibrata 氏が1970年にバンドンの中学生に行なった調査によると、学校内ではインドネシア語を使うもの60.02%、スンダ語を使うもの39.09%であるが、学外ではインドネシア語を使うものがわずかに5.01%、スンダ語を使うもの94.08%となってしまうのである（“Pengaruh Bahasa Daerah dalam Penguasaan Bahasa Indonesia” Murid-Murid SMP Negeri XV Sukarasa, Bardung, IKIP Bandung）。

また、現在インドネシアの教育文化省とオランダのライデン大学の東南アジア・オセアニア言語文化学科の協力により、次のような従来入手しにくかった言語学の研究書が出版されるようになり、地方語の研究の進歩が期待される。

○J.S. Badudu 著 MORFOLOGI BAHASA GORONTALO

○J. Kats, M. Soeridiradia 共著 TATABAHASA DAN UNGKAPAN BAHASA SUNDA

○E.M. Uhlenbeck 著 KAJIAN MORFOLOGI BAHASA JAWA

○S. Kaseng 著 BAHASA BUGIS SOPPENG

○C. Salombe 著 BAHASA TORAJA SAQDAN

○Ch. A. van Ophuijsen 著 TATABAHASA MELAYU

## お わ り に

以上、わずか1年程度の滞在と二度の訪イでは理解できる範囲も限られており、誤りもあろうかと思う。大方の御批正を乞う次第である。最後に1980年にジョクジャカルタで出版された Khaidir Anwar 氏の “Indonesian The Development and Use of A National Language” (Gadjah Mada 大学出版) において、現在の国家の統一言語としてのインドネシア語の成立に日本軍の占領が大きくかかわっていたこと、その後の独立の過程で果たした国家の統一言語としての役割など興味深い研究を行なっているが、この本の巻末に日本占領時にインドネシア語化された日本語の語彙一覧表が載っている。これらの語は必ずしも現在使われているわけではないが、参考までに以下に掲げる。

|          |               |
|----------|---------------|
| Arimasen | not available |
| Arigato  | thank you     |
| Anata    | you           |
| Ano      | that          |
| Ame      | rain          |
| Ashita   | tomorrow      |
| Akai     | red           |
| Butai    | battalion     |
| Benzo    | latrine       |
| Bagero   | a swear word  |

---

|               |                           |
|---------------|---------------------------|
| Baka          | stupid                    |
| Bunshucho     | district officer          |
| Bushido       | a Japanese virtue         |
| Banzai        | Japanese battle cry       |
| Chugakko      | secondary school          |
| Chuo Sangi In | peoples' representatives  |
| Doreba        | driver                    |
| Dai Toa       | Greater East Asia         |
| Dokuritsu     | Independence              |
| Dai Toa Senso | the Pacific War           |
| Dai Nippon    | Greater Japan             |
| Dai Gaku      | university                |
| Dai Dancho    | commander                 |
| Donata        | who                       |
| Fusimban      | duty vigil                |
| Fujinkai      | women association         |
| Gakko         | school                    |
| Ginko         | Bank                      |
| Gunseikan     | Military Governor General |
| Gunseikanbu   | the Military Government   |
| Gunseirei     | Regulations               |
| Genki desu    | quite well                |
| Harakiri      | suicide                   |
| Heitaisan     | Mr. Soldier               |
| Itadakimasu   | bon appetit               |
| Ichi          | one                       |
| Ima           | now                       |
| Inu           | dog                       |
| Ikura         | how much                  |
| Ijo           | alam                      |
| Ichiban       | number one, first class   |
| Jujitsu       | jujitsu                   |
| Judo          | judo                      |
| Jotto         | excellent                 |

---

|               |                                   |
|---------------|-----------------------------------|
| Kakiyasu      | jog                               |
| Kumiai        | union, cooperative movement       |
| Kumicho       | head of Tonary Gumi               |
| Kempeitai     | secret police                     |
| Konnichiwa    | good day                          |
| Konbanwa      | good evening                      |
| Kane          | money                             |
| Keibodan      | Civil Defence                     |
| Kore          | this                              |
| Kodomo        | children                          |
| Kohibito      | lover                             |
| Mareigo       | Malay                             |
| Mashi mashi   | hallo (in telephone conversation) |
| Neko          | cat                               |
| Naore         | back to position                  |
| Nanda kura    | damn you!                         |
| Otosan        | father                            |
| Oranda        | the Dutch                         |
| Oyasumi nasai | good night                        |
| Romusha       | (forced) labour                   |
| Sumubu        | Religious Affairs                 |
| Shu chokan    | Governor                          |
| Soruja        | soldier                           |
| Saiko Sikikan | Commander-in-chief                |
| Sanyo         | advisor                           |
| Sendenbu      | propaganda office                 |
| Seinendan     | youth movement                    |
| Sayonara      | good bye                          |
| Toban         | cook, servant                     |
| Taisho        | gymnastics                        |
| Tenko         | roll call                         |
| Taicho        | chief                             |
| Tekidanto     | mortar (weapon)                   |
| Takeyari      | spear                             |

---

|             |                    |
|-------------|--------------------|
| Tokubetsu   | special            |
| Taisha      | Colonel            |
| Tonari Gumi | Neighbourhood Unit |
| Uchi        | house              |
| Uta         | song               |
| Wakarimasu  | understand         |
| Ware ware   | we                 |

Banzai や Nanda kura (「なんだこりゃ」の意か) の意味のズレを考えると、状況の重さが感じられる。